

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	星のさと全体の共通理念「一人一人に一人一人の介護を」をスタッフ全員で共有している。そしてその意味をしっかりと考え、実践につながるようカンファレンスやスタッフミーティングなどで話し合っている。	毎月第2火曜日に定例化されているスタッフミーティングやカンファレンスで理念を確認し合っている。シンプルではあるが意味深い内容があることを職員は理解しており、各入居者に対する個別支援に反映している。理念にそぐわないような言動が見られた場合には朝・夕の申し送り時に職員間で注意し合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地元の高齢者や地域ボランティア「ひめりんごの会」の皆さんなどが定期的にホームにきて交流を楽しんでいる。又、地域行事の文化祭やお神楽に参加したり、星のさと行事の星のさと祭りなどでも交流をしている。	複合施設全体として毎年7月に地域に向けて開催する「星のさと祭り」では近隣地区の回覧板を使い住民に参加を促している。ホームからも入居者が大切に育てた「ミニ観葉植物」や手作りの「におい袋」をバザーに出品している。大正琴や歌、紙芝居、傾聴ボランティア、手作りおやつなどのボランティアなど多くの団体や個人の来訪があり、近くの小学校児童との交流も行なわれている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で認知症の理解について学んだり、事例を通して支援の一例を報告する機会を設けている。又、管理者は地域包括の依頼を受け、介護予防教室で認知症の理解などの講師を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、入居者の状況や生活の様子、外部評価の結果を報告したり、入居者の皆さんと交流している。そこでの意見等はミーティングなどでスタッフに伝え、サービス向上につながるよう話し合っている。	年間計画を立て2ヶ月に1回実施している。家族、民生児童委員、区長、介護相談員、地域包括支援センター職員、医師等が出席している。敬老会など、ホームの行事に合わせて実施することもあり、家族の出席も多い。意見や要望についてはホームの運営に活かしている。消防訓練にも委員の方に参加していただき意見をいただいている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	長野市の集団指導に出席している。必要があれば連携を図っている。	地域包括支援センターからの依頼を受け、介護予防教室で管理者が講師として認知症等について伝え、理解を深めていただくようにしている。市から派遣されるあんしん(介護)相談員の受け入れを行っており、意見・要望等をサービス向上に活かしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	隣接する老健との合同研修やスタッフミーティングなどで身体拘束について学んでいる。拘束のないケアを実践している。	職員自身が体験学習などを通じて身体拘束について正しく理解しており、そのような状況は全く行なわれていない。外出傾向の入居者についてはパターンを把握しており、職員が共に散策したり、一時帰宅後ホームへ戻るなど、本人が納得できる対応をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	隣接する老健との合同研修やスタッフミーティングなどで高齢者虐待防止について学んでいる。スタッフは、日々ケアをしながら虐待が見過ごされることがないように意識している。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	スタッフミーティングなどで日常生活自立支援事業や成年後見制度について学んでいる。資料もホームにおいてあり、いつでも閲覧できるようになっている。 実際に成年後見制度を利用している入居者もいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、書面と口頭で説明をしている。必ず不明な点等を尋ねて理解・納得を頂けるよう対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月、あんしん相談員がホームに来て入居者の方と話をしながら、意見や要望を聴く機会を設けている。 入居者や家族とは、日頃からコミュニケーションを図りながら、意見や要望を言いやすい関係・雰囲気づくりを心がけている。 意見や要望をスタッフ全員で把握して運営等に反映させている。	入居者のうち約三分の一の方が自分の意見や思いを表出することができる。複合施設全体のお祭りや敬老会など、毎月なんらかの行事が組まれており、家族と接する機会も多く、忌憚のない意見・要望が寄せられている。ホームからの働きかけとして「生活状況連絡票」が毎月家族等に送付されており、入居者の最新の情報ももたらされており、お互いの信頼関係も厚い。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフミーティング或いはその都度意見を聞き、反映させている。	スタッフミーティングが毎月第2火曜日夜に行なわれており夜勤者以外が参加している。業務の見直しや研修報告、その時々課題について話し合われている。職員と管理者とのコミュニケーションも円滑で、ミーティング以外での報告・連絡・相談も日常的に行なわれている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の勤務状況を把握し、その人の能力、やりがい感を見極め、連携して働けるよう環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを	スタッフミーティング・隣接の老健との合同研修会・法人外の研修に参加し、その報告等をスタッフ全員が聞きレベルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	善光寺平グループホームねっとに参加している。他のグループホームとの交流会にスタッフも参加してネットワークづくりをしている。又、研修で他のグループホームで実習をしたスタッフもあり、そこでの経験や情報を皆に伝えてサービスの質の向上に取り組んでいる。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に面談で本人とお会いしている。その様子やアセスメント情報、関係事業所からの情報などをみんなで把握し、少しでも安心して居心地良く暮らせるよう支援している。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の面談の中で、不安な事や要望等を聞く機会を設けている。又、見学時や荷物搬入時などでも、挨拶をしたりコミュニケーションを図り関係づくりに努めている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	面談をしながらどのようなサービスがいいのかを一緒に考えている。関係事業者とも情報を交換しながら、ニーズに沿ったサービス利用ができるよう対応している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日頃から、支えあう関係を意識している。一人ひとりのできる力・わかる力を大切にそれらが発揮できる場面を暮らしの中で作っている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との関係をとても大切に考えている。毎月生活の様子を手紙に書き報告している。又、面会だけでなく行事への参加や誕生会への参加などを通して、共に本人の暮らしを支えていく関係を大切に心がけている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	家族や家との関係はもちろん途切れないよう支援している。又、友人とハガキのやり取りをしたり、なじみの美容室・床屋・歯医者に出かけたり、墓参りに出かけたりと個人の状況や願いを大切に対応できるよう家族と協力しながら支援している。	友人や隣人の訪問を受ける入居者がいる。家族とともに入居前からの馴染みの美容室や床屋、お墓参りにも出掛けている。入居者の要望を聞き、入居前からの行きつけのお寿司屋へ職員が同行することもある。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係をよく観察し、互いに心地よく関わりあえるよう支援したり、関係を見守っている。散歩の時に、車椅子の方を押して下さったり、車椅子の方は歩く方の杖を持ったりと支え合えるような支援を心がけている。			

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ホームを退居された後も、ホームで収穫した紫いもを届けに行ってお参りをしたり、家族をクリスマス会に招待してギター&ハーモニカ演奏をして頂くなどこれまでの関係を大切にしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	居室担当ごとにセンター方式のアセスメントを活用し、一人ひとりの思いや意向などの把握に努めている。又、他のスタッフもみんなて日々の暮らしの中で関わりながら望む暮らしを検討している。	入居後3ヶ月間、入居者の担当職員により「24時間アセスメントまとめシート」が作成され、本人の立場になって願いや支援してほしいことを拾い上げている。入居前の面談で得た情報に加え、周辺症状などを整理し、原因や背景を探り、より良く暮らせるための工夫を職員全員で考えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談時に、生活歴や生活環境・なじみの暮らし方・今までのサービス利用の状況などを本人・家族・関係事業所から話を聞いて情報を得ている。入居後も、共に暮らしながら情報を収集し把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日頃から本人の意思や自己決定を大切に過ごせるよう支援している。スタッフは観察した心身状態を毎日の申し送り等で把握している。できる力やわかる力をセンター方式のアセスメントを使用して把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスを定期的開催しながら、それぞれの意見を反映して介護計画を作成している。ターミナル期のケアプラン変更など現状に即した介護計画を作成している。	計画作成担当者が担当職員の意見を取り入れ介護計画を作成している。文書で書いていただいた家族の意向も組み込み、計画書を早い段階で説明し、同意を得ている。状態に変化が見られる場合は変更をかけている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のカルテに日々の生活の様子やケアの実践した内容などを記入している。スタッフは必要な情報を毎日の申し送りで共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズに対して、隣接する老健のPTに支援をお願いしたり、訪問マッサージを利用している方もいる。個別に外出に出かけたり、家に帰るなどの支援を柔軟に行っている。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方がホームに訪ねてきて下さっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医は本人・家族の希望で決めている。スタッフは日頃から主治医に情報を提供し、連携に努めている。体調不良や薬の変更時などには必ず家族等に報告している。	基本的には入居前からのかかりつけ医を継続しており、希望により同じ法人の医療機関に変更している。週1回訪問の医師による健康相談も行なわれ、問題のある場合には主治医に連絡をとり職員とともに支援している。看護師も2名勤務しており、家族や医療機関との連携を図っている。家族の元に毎月送られる「生活状況連絡票」にも「食事」「排泄」「薬」の欄があり、細かく記入されている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員として、看護師が勤務している。スタッフは、日々共に暮らしながら気づきや症状などを把握し、看護師と協力して適切な受診や処置などが受けられるよう支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際には、サマリを提供している。病院のケースワーカーや看護師から本人の様子や経過などを聞いたり、お見舞いに行き情報の交換を行っている。同一法人の医院や協力病院とは日頃から連携を図るようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居前の契約時に重度化及び看取りに関する指針をもとに家族に説明をしている。また、本人の状態をみながら早い段階から話をしたり、必要に応じて家族と面談をしながら看取りの支援を行った。現在も行っている。	入居契約時に重度化や看取りに関するホームの指針を説明している。家族、医師、職員間での連携を取り、今年度1名の入居者の看取りを行った。法人の他の施設で看取りを経験している職員も多く、他の入居者の動揺もなく満足のいく結果となった。家族からの感謝の言葉も寄せられており、その後も野菜をいただくなどホームとの関わりが継続されている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	隣接する老健との合同研修やスタッフミーティングなどで応急手当や初期対応について学び、訓練する機会を設けている。又、マニュアルも作成しており、いつでも閲覧できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回消防訓練を行っている。地域と消防協定を結んでいる。昨年の秋には、消防署の指導の下、地域住民に協力してもらい実践的な消防訓練を行うことができた。	ホーム単独での消防訓練を消防署の指導の下、実施している。夜間想定で車椅子の入居者も職員とともに避難をしており、より実践的な訓練となっている。スプリンクラーは開設当初より設置されている。食料品、介護用品の備蓄も隣接老健に保管されている。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりに合った言葉かけを心がけている。誇りやプライバシーを大切にしたい暮らしが継続できるよう頃頃から配慮している。	職員の言葉かけには語頭や語尾に必ず「○○さん」が付いている。言葉遣いも普段通りで堅苦しいものではなく、年長者への敬意と配慮が言葉の端々に見られた。排泄の失敗についてもさりげなく、素早く対応し、他の入居者に悟られないようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々一緒に過ごしなが、思いや希望を表すことができる言葉かけや支援を心がけている。飲みたい物やおしゃれなど自己決定を一人ひとりの力量をみながら対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	個別ケアを意識し、起床の時間や掃除をしたい時間、家に帰りたい思いなど一人ひとりの生活のペースや希望・意向を尊重して暮らせることを心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	アセスメント情報や本人のその時の意向を大切に、ヘアネットをかぶったり、重ね着をしたり、スカーフを巻いたり、髪を染めるなど一人ひとりに合わせて支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一人ひとりの力量や意欲を大切に、食事作りや片付けをしている。又、食事も好みを尊重している。一緒に楽しく食事ができるよう会話や見守り、介助を行っている。	介助を必要とする入居者も数名おり、ミキサー食やキザミ食も提供されている。約三分の一の方が手伝いができ、調理や片付けに勤しんでいる。冬場は「なべパーティー」や「餃子パーティー」などを楽しみ、おやつには昔ながらの郷土食である「おやき」や「こねせんべい」、「こねつけ」などを職員とともに作ることもある。法人の管理栄養士によりカロリー計算のされたメニューが組まれている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食べる量や水分量は健康状態や好みを把握して個別に対応している。隣接する老健の管理栄養士がたてた献立を使用しており、栄養バランスの良い食事になっている。状態に応じて、高カロリー流動食などを摂取しているケースもある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとりの力量に合わせた口腔ケアの支援をしている。個別にスポンジガーゼやクルリーナなどの口腔ケア用品を活用している。又、協力歯科医や歯科衛生士に、関わってもらい、口腔ケアや口腔体操などを行っている方もいる。		

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別に排泄パターンの把握に努め、力量や状態に合った排泄の支援ができるよう心がけている。気持ちよくスムーズに排泄ができるよう工夫している。	ほぼ全員の入居者が何らかの介助を必要としている。布パンツとパットを使用している方が殆どで、生活のリズムをシートで分析し、できるだけ自力で排泄できるように声がけしたり支援している。夜間のみポータブルトイレを使用する方も若干名いる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜を多く摂り、状態に合った形態の食事提供や適量な水分摂取を促している。適度な運動も心がけて支援している。トイレやポータブルトイレに座り排便を促す習慣も大切にしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には、週2回入浴日を決めているが、個別のニーズに合わせて、夕食後に入浴したり、別の日に入浴をしたりと支援している。	広い浴室内には家庭用の浴槽が2つ設置されており、車椅子の入居者にとっても余裕が十分感じられるようになっている。ターミナル期の入居者にも清拭の他、職員が抱えながら湯船に浸ることもある。家族と同伴で近くの温泉に宿泊する入居者もあり、ホームのシャワーチェアの貸し出しも行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠のパターンを把握し、睡眠の支援をしている。又、体調やその時々様子に応じてリクライニングソファやこたつなどで休息している。定期的にシーツ交換や布団を干して気持ちよく眠れるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬は個別カルテに用法や用量が記載してある。目的や副作用は一覧を作成しており把握できるよう工夫している。服薬は一人ひとりの力量に合わせて支援している。症状の変化も留意して観察している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴を活かしながら、現在の力量と合わせて家事や畑仕事などの役割や、塗り絵や絵手紙などの楽しみ、読書や散歩などの好むことを一人ひとりに合わせて発揮できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	戸外に出かけたい意思がある時には、出来る限りその思いにそえるよう支援している。一緒に行きたい方向へ歩いたり、車に乗って家に帰ってみたり、寿司を食べに行ったり希望に合わせて対応している。家族とも協力をしながら支援している。ホーム全体では外出行事を計画して出かけている。	入居者の要望に沿って職員と一対一で出掛けるような支援もしている。杏や桜の花見、いちご狩りなど春から秋にかけて近隣の名所旧跡へと出掛けている。外出する際は約半数の方が車椅子を必要とするが、隣接老健のリフト車をお借りし出掛けている。また、隣接の老健で行なわれる音楽療法などのイベントに参加することもあり気分転換を図っている。	

グループホーム星のさと

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	一人ひとりの希望や力量に応じてお金を所持し、買い物や外食を楽しんでいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族や友人と手紙やハガキのやり取りをしている方がいる。又、一人ひとりの力量に応じて電話で話ができるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のスペースには、季節の花や飾り物、お知らせ・写真ボードがあり季節感が感じられる。又、家事の音や食事のにおい・洗濯物など生活感も感じられる。中庭などからの光や風が心地よく入ってくる。冷暖房などで室温調整もしている。	浴室・脱衣室、トイレ、食堂、居間などどれをとっても「ゆったりとしていて広い」という印象を先ず感じる。床暖房とエアコンも設置されており、昨年来の酷暑にも十分対応できる。お知らせボードには外出や行事のスナップ写真が貼られており家族や来訪者の心を和ませている。オープンキッチンで入居者と職員が仲良く調理をし、食卓テーブルに座った他の入居者との会話も弾んでいた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室や中庭を眺めながら過ごせるスペース、リクライニングソファなど一人や個別で思い思いに過ごせる居場所がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みのものや愛用品・家族の写真などを本人や家族と相談しながら持ってきてもらい、居心地良く過ごせるよう工夫している。タンス・本・テレビ・パッチワークの作品・愛用の布団・絵ハガキの道具などが一人ひとりに合わせて持ち込まれている。	トイレ付きの居室が約半分ほどあるが、全面ガラス窓でもあるので開放感があり広い。洗面台、収納庫・棚なども備えられており、随所に工夫が見られる。入居者は自宅から持ち込んだタンスやテレビ、コタツ、ベッドなどを自由に配置し、ベランダでアサガオを育てている方もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホーム内はバリアフリーになっている。一人ひとりの力量や状態に応じて、居室の物品や配置を工夫している。L字柵やセンサーマットの使用などにより、安全かつ自立を大切にして過ごせるよう支援している。		